

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和5年8月に掲載するものを紹介します。

# 伝道掲示板

blogから

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。經典の引用や、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。松岩寺ホームページからブログへリンクしています。

## 八月のことば

元来室内の灯し火は、  
冬は幾らか明るくし、  
夏は幾らか暗くするべきである。

谷崎潤一郎『陰翳礼讃』

ずいぶん昔のことになります。学校のテストに『陰翳礼讃』と書いてなんと読むか。そんな問題があったような気がします。「いんえいらいさん」が正解です。

「翳」の字はまず書けないな。書けないばかりか、谷崎潤一郎（一八八六―一九六五）の『陰翳礼讃』を知らなければ、読むのも困難な熟語では。

作家は冒頭のことばの前に次のよう書いています。

「夏など、まだ明るいうちから点灯するのは無駄である以上に暑くもある」。そして、暑さを消すわざとして、「自分の家で四方の雨戸を開け放って、真っ暗な中に蚊帳をはってころがっているのが、涼を納れる最上の法だと心得ている」。

またまた、読み方テストです。「涼を納れる」の「納」はなんと読むのか。漢和辞典を引くと、「納」の字には、「いれる」という読みがあるので「リヨウをいれる」と読むのだろうか。

『陰翳礼讃』は昭和八年に書かれた随筆のようだけど、その頃作家は神戸市に住んでいたのだろう。四方に雨戸がある部屋なんていうのは、どんな部屋なのだろうか。そんな部屋を開け放して、蚊帳をはって寝るなんていうのは、物騒な現代では防犯上からでもできないし、そもそも蚊帳もない。

私は蚊帳をかううじて、知っている世代ですが、蚊が侵入してこないほど、ちいさな編み目の布を天井からつりさげるわけで、蚊も入ってこないけれど、風も入ってはいない。四方が開いているような部屋ならば、風が通って涼しいだろうけれど、恐くて落ちつかないから安眠なんてできないだろうな、と思う。

さて、八月は月遅れのお盆です。お盆の風習というのは、地域で千差万別。民俗学の研究材料の宝庫なのでしょうが、松岩寺では、八月十三日の未明に提灯をもって墓地へ行き、盆迎えをする。これって、珍しいのではないかなあ。ゆれる提灯のともしびに、しみじみと哀れを感じるの、まわりが暗いから。LED電球に照らされて明るいなかでは、味気ない。お盆でお仏壇に灯明をつけることも多くなる季節。まわりを暗くして、ろうそくの灯りを楽しんでみては。でも、くれぐれも火の要領。つけっぱなしは厳禁です。

不連続シリーズ

# 見

つけた!

街かどに禅を探し、現代に仏教を見つける

接客業を仕事とする方から聞いたのですが、「前と同じやつ」というのは迷惑な注文なんだそうだ。本人は前がわかっていても、聞く方は前がなんだか記憶していないから。わかっちゃいるけど、次のように書き始めます。前にお仏壇の花は、季節の花を供えるのが基本と、書きました。春には春の花を。夏には夏の花をといった具合ですが、ここでひとつ注意があります。お盆の花です。現在のお盆は七月、あるいは月遅れの八月盆です。季節観の目安となる、俳句歳時記で

「お盆」に関連する言葉を調べると、秋の季語になります。例をあげると、「盆踊り」「盆供」「柵経」「ほおずき」「みそはぎ」。みな、秋の季語です。だから、僧侶用の仏教行事の指南書『法式梵唄抄（ほっしきほんばいしよ）』では、「お盆には秋の花を供えるべし」と書かれています。

でも、「蓮の花」と「蓮の葉」は、夏の季語です。ミノハギが秋の花だというのに、「蓮の葉」は夏の花。松尾芭蕉に次の俳句があります。

蓮池や折らでそのまま玉まつり

解説を『日本秀歌秀句の辞典』（小学館刊行）から引いてみます。

（貞享五（一六八八）年七月、鳴海の知足亭滞在中での作。



写真 千田完治

「玉まつり」は七月中元の盂蘭盆会。「蓮池」の「蓮」を「折らで」、「池」全体をそのまま仏前に供えようという趣向。

季語は「玉まつり」で秋。さすが、俳聖。蓮の花は夏だから、蓮池で逃げたのか。というか、「蓮が綺麗だから折らないでそのままお盆の供花にしよう」という句意ですが、綺麗だから折らないのではなくて、蓮の花というのは折ったら最後。どんなにうまく活けても、すぐになよなよとしぼんでしまうのです。もちろん、芭蕉さんはそんなことはご存じだったでしょう。だから折らなかつた?

厳密に突き詰めていくと、白黒のはっきりしないグレーゾーンも出てくるのに、現代人は、白か黒かはっきりさせないと満足できない。グレーゾーンといえば、仏壇にお供える花は一つか、あるいは対がよいのか。明確な答えを私は持っていない。

たとえば、またもや「前に」がでてきますが、前に話題にした、お正月の松飾り、これは対ですよね。でも茶の湯の茶花は、ひとつ。茶花がひとつの由来には、釈尊の「拈華微笑」があるというけれど、結局のところ、一つでも二つでも、その場にあっていれば、どちらでもよいのでは。そのうちに、「拈華微笑」については書かなくては。たぶん、「以前書きましたが」という迷惑な始まり方になると思います。（おわり）